

石油の一滴は血の一滴

昭和十三年、日中戦争は、当時『シナ事変』と呼ばれ、南京が陥落すれば、間もなく片がつくと考えられていた。

満洲事変・上海事変・すべて『事変』である以上、本格的な戦争に深入りするおそれはないというのが、一般庶民の常識となっていた。

ところが、昭和十三年（1938年）に入っても戦火の消えるきざしは全くなかった。

近衛内閣は「蒋介石政権を相手にせず」と声明して、自らの戦争相手を否認した。

しかも、陸軍は革新官僚と結んで、総力戦を完成するためには議会の存在を事実上否認する「国家総動員法」を無理やり成立させた。

陸軍部隊は、華北、華中の双方から中国中央軍を殲滅させる作戦を立てたが失敗し、更に揚子江を遡り武漢三鎮攻撃が実行され、これを占領したが、国民政府は屈服しなかった。

国内では長期戦の覚悟が叫ばれ、ガソリン・綿製品が不足を告げて、戦争の影響が国民生活を圧迫した。

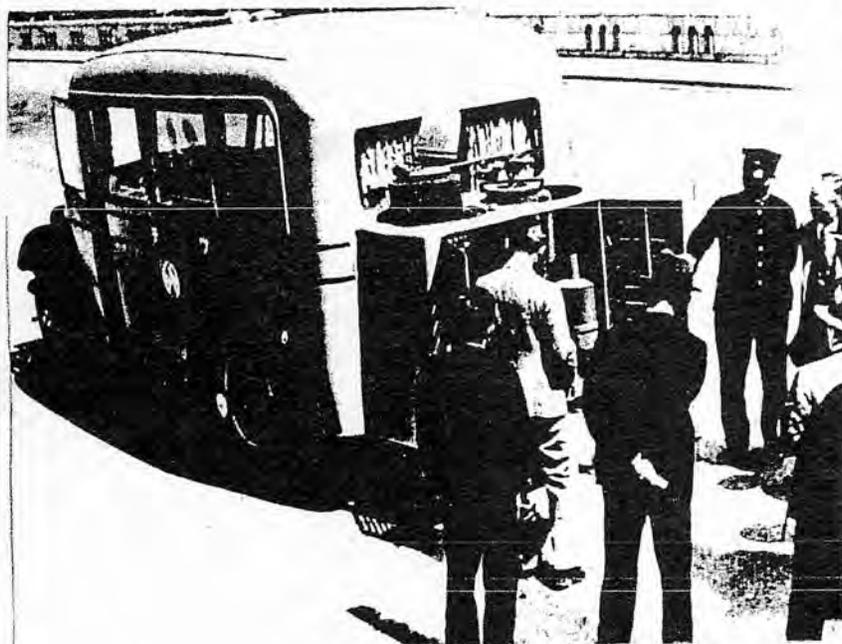
「ガソリンの一滴は血の一滴」という、標語などが盛んに叫ばれたし、「贅沢は敵だ」の看板に書かれた標語が、東京銀座に掲げられたりし

た。

この標語の、贅沢は敵だの、敵の上に「す」の字を書き込んだ豪傑がいたそう。

窮屈な庶民は、頭にきて「贅沢は素敵だ」にしたものであろう。

当時犯人を、憲兵隊が血眼になって捜したと聞いたが、結果は知らない。



『ガソリンの一滴は血の一滴』

の

標語は「世界に誇る」木炭を焚いて走る、木炭バス

が、代行で走るようになった。

坂道に來ると、う

ごかなくなりみんなで押した

そう。